Zoom Up Tome 2018

Rowing

「五輪への覚悟」

第58回全日本ボート新人選手権大会 男子舵手つきフォア 優勝 日本体育大学 小野寺紘都

Onodera Hiroto

1997年9月17日、津山町平形生まれ。日本体育大学2年。柳津小、津山中時代は野球で活躍。佐沼高進学後、ボート部へ入部。持ち前の瞬発力と類まれな「こぐ」技術で、頭角を現し、高3時には「東北に小野寺あり」と言われ、和歌山インターハイ、シングルスカルで6位入賞を果たす。身長175㌢。父、母、姉、妹、祖母の6人家族。趣味は料理と旅行で、好きな言葉は「一寸先は光」。

第58回全日本ボート新人選手権大会は2017年11月10日から12日まで、埼玉県戸田市の戸田ボートコースで開かれ、男子舵手付きフォアで日本体育大学が優勝し、初の栄冠を手にした。

船首に最も近いこぎ手、バウで出場した小野寺は「本年度の目標は、全日本選手権での入賞と全日本大学選手権(以下、インカレ)での優勝。全日本は予選で負け、インカレは準決勝で負けて6位。この大会は落とせなかった。のどから手が出るほど欲しかった」と、自身初の全日本タイトルの獲得を心から喜んだ。

11月10日、予選当日。多少風はあったが、こぎづらいという状況ではない。「できるだけの準備はしてきた。後はレースで全力を尽くすだけ」。前評判の高い大阪府立大が同組に入った。「落とせない大会、計算なしでゴールまで全力で行こう」と、小野寺はクルーに声を掛けた。

小野寺が務める「バウ」は、こぎ手全員の方を向いているので、声をかけて盛り上げたり、アドバイスをしたりと、クルーをリードする。艇の上下動が最も激しく、こぎのタイミングを合わせることが難しいため、高い技術がなければこなせないポジションだ。

持久戦では負けない自信があった。スタートの合図とともに、全力でこぎ出す。思ったより大阪府立大が出てこない。精神的に優位に立った日体大は、終始ペースを変えずゴール。2位に17秒以上の大差をつけて、予選を通過した。

翌11日、準決勝と決勝が行われる。準決勝は、今大会最大のライバルと目した法政大と同組に。クルー間に、重い空気が流れた。コースコンディションも悪くなかったので、先行逃げ切りの作戦で臨んだ。しかし、スタートで大きくミスをし、トップから3挺身離され4チーム中3位に。

全力でこいではいるものの、千㍍地点を超えてもライバル法政大はおろか、2位の東京経済大にも追いつけない。クルーたちにも焦りの色が見えた。「大丈夫だ、行ける。絶対落とすな」と、小野寺はげきを飛ばした。2位までが決勝、それ以下は順位決定戦行き。是が非でも負けるわけにはいかない。

500㍍地点で、2位と1・6秒差。死に物狂いでこぎ続けた。ゴール直前、東京経済大に追いつき、並んでゴール。順位発表のアナウンスがなかなか出ない。艇から降りて、陸に上がったところでアナウンス。「1位、法政大、2位、日体大」。歓喜に沸く日体大クルー。喜んでばかりいられない。2時間後には決勝が待っている。腕と足をアイシングし、サポートメンバーからマッサージを受け、疲労回復に努めた。

「練習のスピードを出せれば負けない」。決勝はいつも通り、持久戦の後半勝負で行くことに。スタートは特に問題なかった。日体大は500㍍地点でトップに出る。練習通りのこぎができていたので、クルーに焦りはなかった。千㍍地点で、2位に4秒差をつけ、そのままゴール。悲願のタイトルを手にした。

小野寺は、津山中から佐沼高に進み、ボート部へ入部。線が細いながらも、優れた瞬発力を持ち、オールを通して水に力を伝える能力に長けていた。高校時代の恩師、佐沼高ボート部の三塚芳久監督は「入部してきたとき『期待できる』と思った」と、当時を振り返り、目じりを下げる。

性格は明るく前向きで、常に大きな目標を掲げる。「自分にプレッシャーを掛けて、それをばねに努力する」小野寺は、「高校日本代表になり、インターハイで優勝する」を公言。しかし、実力がありながらも、タイトルには縁がなかった。代表選考会は惜しくも落選、インターハイは0・07秒差で決勝進出を逃した。「あの悔しさがあるから、今も続けられる」。大学進学後は、日本一を目標に、ボート漬けの日々を過ごしている。

小野寺には大きな目標がある。「東京五輪に出場すること」。目標を達成には、今年1年をいかに過ごし、レベルアップできるかが「かぎ」になる。「余計なことを考えず、心と体に向き合い、どこまでも自分を追い込んでいくだけ」―。自らのオールで、五輪をキャッチする覚悟はできた。あとはこぎつづけるだけだ。